

結果構文の獲得について

On the Acquisition of the Resultative Construction

本多 明子[†]

Akiko Honda

[†]神戸女子大学

Kobe Women's University

a-honda@yg.kobe-wu.ac.jp

Abstract

This article presents the relationship between the prepositional resultative construction (RC-PP) and the adjectival resultative construction (RC-Adj) in English from a cognitive linguistic point of view. On examination, the rate of young children's utterance of RC-PP is higher than that of RC-Adj. To explain the reason, a comparison with the difference in form and meaning between these two may be helpful. This paper shows the inheritance link between the two constructions on the basis of Construction Grammar theory. RC-Adj is motivated by RC-PP.

Keywords — **Prepositional Resultative Construction, Adjectival Resultative Construction, Inheritance Link, Acquisition**

1. はじめに

英語には、(1)に見るような結果構文 (Resultative Construction (以後、本論文では RC と明記する)) と呼ばれる構文が存在する。

(1) Mary wiped the table clean.

認知言語学の用法基盤理論、構文文法理論 (Goldberg, 1995, 2006) に基づくと、RC の形式と意味は(2)のようになる。

(2) 形式 : [Subj V Obj RP]

意味 : [X CAUSES Y to BECOME Z_{state} by V-ing]

尚、形式の Subj は Subject, V は Verb, Obj は Object, RP は Resultative Phrase を表す。RP では V (動詞) によって表される行為の結果として生じる Obj (目的語) の状態変化が言語化される。RP (結果句) には、(1)の例のような Adjective (形容詞) だけでなく、(3)に見るような Prepositional Phrase (前置詞句) も生じることができる。

(3) Mary cut her child's birthday cake into eight pieces.

本論文では、形容詞を伴う結果構文を RC-Adj, 前置詞句を伴う結果構文を RC-PP と表記する。

構文文法論では、形式的、意味的に類似する構文同士を継承関係 (Inheritance Links) により捉え、それぞれの構文特性を説明する。継承関係により結ばれた構文は文法体系の中でネットワークを構築する。RC-Adj と RC-PP の関係について、構文文法論は関連構文であるとしているものの、具体的にどのような関係があるのか明示していない (Goldberg, 1995, 2006; Goldberg and Jackendoff, 2004)。RC-Adj と RC-PP を言語獲得の観点から見てみると、次節で示すように、子どもの成長には個人差が認められるものの、概して、言語獲得の初期段階では、RC 自体の出現頻度は高くないものの、RC-Adj に比べると RC-PP の発話頻度は高い傾向がある。

本論文では、幼児期の RC-Adj と RC-PP の出現状況について調べ、そこで得られた結果と構文上の特性を踏まえ、構文文法論の観点から両者の関係を示す。2 節において、RC-Adj と RC-PP の出現に関する調査結果を示し、3 節では、その結果をもとに両構文の特性を指摘しながら、RC-Adj と RC-PP の発話頻度に係る要因について考察し、この二つの構文の関係を提示する。4 節は纏めである。

2. RC-Adj と RC-PP の出現状況

子どもの発話データベース CHILDES から、英語を母語とする子ども 3 名を対象として RC-Adj と RC-PP の出現状況について調査した。男児 Kuczaj は 2 歳 4 ヶ月から 5 歳 6 ヶ月までの記録であり、女児 Lara は 1 歳 9 ヶ月から 3 歳 3 ヶ月まで、男児 Thomas については 2 歳 0 ヶ月から 4 歳 11 ヶ月までの記録である。RC-Adj と RC-PP の獲得について、言語獲得の初期段階では、RC-Adj は確認し難いが (拙論, 2019)、その一方で、RC-PP の出現頻度は高かった。例えば、前置詞句 in half や into/in pieces を伴う発話を取り上げると、(4), (5), (6) に見るように、3 名ともに RC-PP が頻繁に確認できた。

- (4) a. can you cut it in half? (Lara, 2歳9ヶ月)
 b. I'll break it in half, shall? (Lara, 2歳10ヶ月)
 c. I break them in half, I did. (Lara, 3歳0ヶ月)

- (5) a. I broke it in half. (Kuczaj, 3歳3ヶ月)
 b. here cut it in half okay (.) Dad?
 (Kuczaj, 3歳4ヶ月)
 c. break it in half. (Kuczaj, 3歳5ヶ月)

- (6) a. broke it into pieces. (Thomas, 3歳4ヶ月)
 b. I break it all in pieces. (Thomas, 3歳4ヶ月)
 c. crushes it <all up in> [>] pieces.
 (Thomas, 3歳8ヶ月)
 a. cut them into little pieces. (Thomas, 4歳0ヶ月)

一方、形容詞を伴う RC-Adj の発話については、(7)に見るように Kuczaj において確認できたものの、Lara や Thomas の発話では確認できなかった。

- (7) a. they knock the rattlesnakes dead.
 (Kuczaj, 3歳5ヶ月)
 b. and it didn't even crack my head open.
 (Kuczaj, 4歳1ヶ月)
 c. somebody knocked the Lone_Ranger
 unconscious. (Kuczaj, 5歳0ヶ月)

但し、Lara の発話の中には、(8a)のような目的語の it が言語化されていれば RC-Adj として成り立つ表現や、Thomas では RC-Adj に近似の発話の確認される程度であった。

- (8) a. I cut 0it [*] open. (Lara, 2歳11ヶ月)
 b. then you just put [/] paint it yellow and then I put
 a yellow light in. (Thomas, 4歳9ヶ月)

では、なぜ、幼児期では RC-Adj に比べると RC-PP の発話頻度は高いのだろうか。この点については、次節で RC-Adj と RC-PP の構文特性の違いに注目し考察する。

3. RC-Adj と RC-PP の構文特性

まず、RC-Adj と RC-PP の共通点については、(2)でも示したように、形式面では単文構造でありながら、意味の側面において、原因事象と結果事象の複合的な事象から成り立つ点が挙げられる。

- (2) 形式 : [Subj V Obj RP]
 意味 : [X CAUSES Y to BECOME Z_{state} by V-ing]

それに対して、RC-Adj と RC-PP の相違点は、形式面では、RP (結果句) に形容詞が生じるか前置詞句が生じるかの違いであり、意味的な側面においても、RP によって表される状態変化、即ち、結果事象が何に起因するかの点で異なっている。

RC-Adj から見ていくと、先行研究において指摘されているように、RP には制限が認められる (Green, 1972; Goldberg, 1995)。*の印は文法構文として成立しないことを示す。

- (9) He wiped it clean / dry / smooth / *damp / *dirty /
 *stained / *wet. (Green, 1972)

例えば、形容詞 clean と反意語の dirty を取り上げて考えてみると、汚い布巾で拭いたというように、文脈を整えれば、(10)のように clean も dirty も言い表すことができる。

- (10) Mary's wiping the table caused it to become
 clean/dirty.

しかしながら、この場合、注目すべきはテーブルが汚くなった原因は布巾であり、テーブルを拭くという行為ではない。このことは、(11)からも確かめられる。

- (11) Wiping a table generally causes it to become
 clean/??dirty.
 (Mary wiped the table clean/*dirty.)

つまり、行為と結果状態の二つの事象間に因果関係があるとき、RC-Adj で記号化することができる (拙論, 2004)。

一方、RC-PP では、RC-Adj とは異なり、結果事象で表される状態変化に直接的に関わる原因は主語または発話者にある。RC-PP に、主語または発話者の意図が関わっていることは、非意図的な意味を表す副詞 unintentionally と RC-PP が共起できないことから確かめられる。

- (12) *Mary unintentionally cut her child's birthday cake
 into eight pieces.

発達心理学 (Astington, 1993) によると, 子どもは2歳を過ぎた頃から発話の中に自己や他者の意図を表す表現を用いるようになるという調査結果がある。

- (13) Mother: You're hurting me!
 Child: Sorry. Sorry. I don't mean to.
 (Astington, 1993: 90)

- (14) Mother: He bit you on the head?
 Child: Yes.
 Mother to brother: Philip is that true?
 Brother: No.
 Child to mother: Yes! On purpose!
 (ibid.)

男児 Kuczaj と父親とのやり取りを見てみても, サンドイッチのパンを何等分に切り分けるかについて, Kuczaj の RC-PP を用いた発話から意図が汲み取れる。

- (15) a. why didn't you cut this sandwich in three pieces?
 (Kuczaj, 4歳0ヶ月)
 b. (ex)cept this time cut it into four pieces.
 (Kuczaj, 4歳0ヶ月)

以上を纏めると, RC-Adj と RC-PP の間に見られる構文特性の違いは, RC-Adj では結果事象の直接的な原因は行為であるのに対して, RC-PP では, 主語または発話者の意図である。このような構文の特性上, RC-Adj を獲得するには, 子どもは, 現実世界において日々の経験を基盤にしながら形容詞 (Adj) によって表される状態が, 具体的にどのような行為と原因と結果という関係で結び付いているのか認識していく必要がある (拙論, 2019)。それに対して, RC-PP の獲得においては, 結果事象と因果関係にあるのは行為だけでなく, 状態変化の最終的な指定には主語または発話者の意図が関わっている。構文特性に加え, 2歳頃から子どもは意図を持った発話ができることから, 言語獲得初期段階で RC-PP の出現頻度が RC-Adj に比べると高いといえる。

4. おわりに

本論文では, 構文文法論の観点から RC-Adj と RC-PP の関係について CHILDES から両構文の出現状況を調査し, 言語獲得の側面を考慮に入れつつ考察してきた。

両構文の出現頻度に関して, 幼児期の段階では, RC-Adj に比べると RC-PP の発話率は高いことが示された。RC-Adj と RC-PP の出現状況並びに両者の構文特性を踏まえると, 構文ネットワークにおいて RC-PP から RC-Adj への継承の流れが示される。

今後の課題として, さらに調査対象の人数を増やし, 年齢層の幅も広げて RC-PP と RC-Adj のデータを収集し, RC-Adj が頻繁に観察される時期について調査する。

謝辞

本論文の執筆にあたり, 査読委員の先生方に貴重な御意見を賜りましたことに心より御礼申し上げます。本研究は JSPS 科研費 18K00668 の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] Astington, Janet.W, (1993) *The child's discovery of the mind*, Cambridge MA, Harvard University Press.
 [2] Green, Georgia M. (1972) "Some observations on the syntax and semantics of instrumental verbs", In Paul M. Peranteau, Judith N. Levi & Gloria C. Phares (eds.), *Papers from the eighth regional meeting of Chicago Linguistic Society*. 83-97.
 [3] Goldberg Adele E, (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago, University of Chicago Press.
 [4] Goldberg, Adele E, (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford, Oxford University Press.
 [5] Goldberg, Adel.E. and Ray Jackendoff, (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions", *Language* 80, pp. 532-568.
 [6] Honda (Miyata) Akiko, (2004) "Focalization in Causal Relations: A Study of Resultative and Related Constructions in English", Ph.D. dissertation, University of Tsukuba.
 [7] Honda Akiko, (2019) 形容詞を伴う結果構文と Make 使役構文の獲得について(On the Acquisition of Adjectival Resultative Constructions and Make-Causative Constructions in English) 日本認知科学会第36回大会論文集. (OS10-7).
 [8] MacWhinney, B, (2000) *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk*, 3rd ed. Vol. 2, *The Database*, Mahwah, N.J., LEA.